

本論文は

# 世界経済評論 2023年9/10月号

(2023年9月発行)

掲載の記事です



## 世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読  
期間中

### デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

## いまを考えるための 経済学史

ITI 客員研究員 朽木 昭文



[著者] 西 孝 (にし たかし)

杏林大学総合政策学部教授

[発行] 日本実業出版社, 2023年3月

[判型] 四六判, 256ページ

[定価] 本体2,000円+税

本書は、経済学が厳密な科学では決してありえないという立場からスタートする。経済学は、物理学などの自然科学とは異なり、道徳哲学、社会思想にはるかに近い。そして、過去の経済学者の主張は現在の問題を考察するための「材料」となる。そこで、本書は、「政府の役割」というテーマに限定して、過去の学説・理論を取り上げる。

第1章の近代の主権国家登場では、社会契約論の「利己的な個人」と「社会的な個人」から始まる。

第2章は、19世紀の「自由放任」主義の台頭である。フィジオクラット学派が、「自由競争が社会全体の利益になる」と主張し、そのメカニズムをアダム・スミスの理論により説明する。それは、「利己的な個人」を前提とした需

要と供給による価格調整メカニズムである。ここで、マルサスの人口論、リカードの比較優位の原理、セイの法則が「政府の役割」を否定する。

第3章は、「自由放任」主義への反発である。1811~1816年のラッドライト運動などのような労働者を中心とする群衆による暴動や抵抗運動である。ここに、マルクスによる「搾取」という概念が導入され、資本主義社会での利潤発生メカニズムが説明される。この章には、ドイツ人のフリードリヒ・リストの保護貿易論も含まれる。

第4章は、「自由放任」主義がついにやぶれ、政府の役割を「市場の失敗」により説明する。ピグーの外部不経済である。私的費用と社会的費用の乖離が「市場の失敗」をもたらす。この乖離を一致させるために「政府の役割」がある。政治的には、ドイツのビスマルク、イギリスのロイド・ジョージ、アメリカのフランクリン・ルーズベルトが紹介される。経済学では、「ケインズ革命」があった。混合経済の下では、有効需要の不足を補うために、政府による財政・金融政策が不可欠である。「政府の役割」が、ベヴァリッジの「福祉国家論」という考え方に結実した。

第5章は、戦後の1947年に創立されたモンベルマン協会による「小さな政府」の逆襲である。この協会のメンバーとなった代表は、「自由思想」のハイエク、「貨幣数量説」を基とする「マネタリズム」のフリードマン、「公共選択論」のブキャナンである。ブキャナンは、民主主義におけるポピュリズムがバラマキ的な政策、財政赤字につながることを指摘した。

ところで、100年に一度といわれる新型コロナやロシアのウクライナ侵攻は、自由化、グローバル化、民主主義の再考を人類に迫っている。本書の自由放任に関する「政府の役割」の視点からの経済学史は、まさに今の問題を考える出発点となる。

(くちき あきふみ)